令和6年度
認知症地域支援体制推進全国合同セミナー
2025年1月16日
認知症介護研究・研修東京センター

認知症になってからも暮らしやすい鳥取市をともに創る

～鳥取市認知症施策推進計画策定の取り組み～

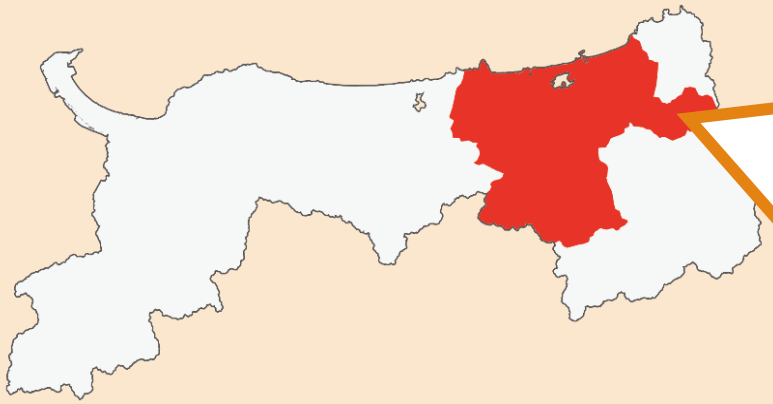


きぼうさちゃん　ふたこぶさん
鳥取市認知症本人の声
活動応援サポーター

鳥取市福祉部長寿社会課
鳥取市中央包括支援センター

保健師　永松　美起
認知症地域支援推進員　金谷　佳寿子

鳥取市の概況



■人口　179,623人
（うち、65歳以上人口 55,850人）

■高齢化率　31.1%

■日常生活圏域　18圏域

■包括支援センター　11か所
（基幹型：1　地域密着型：10）

■認知症地域支援推進員　10名
（基幹型：1　地域密着型：9）

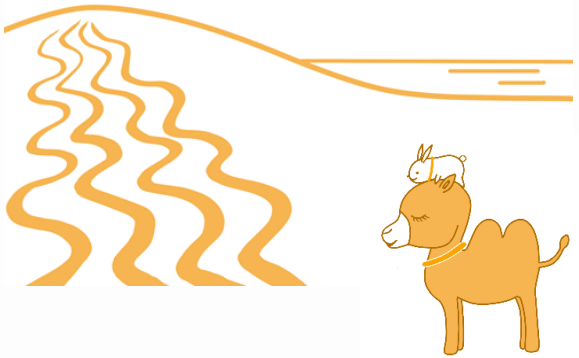
令和6年9月末現在











これまでの鳥取市の認知症施策

鳥取市介護保険事業計画・高齢者福祉計画に基づき認知症施策を推進

第9期鳥取市介護保険事業計画・高齢者福祉計画（R6～R8）について

＜基本理念＞
住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるまちづくり

＜基本方針＞
自己実現を可能にする環境づくり

＜施策目標＞ ※認知症に特に関係するもの
認知症や要介護状態になっても助け合って暮らし続けることができる
意思決定が困難になってもその人らしい暮らしを継続することができる

＜重点的に取り組むテーマ＞
認知症本人や家族の想いに応える、認知症とともに生きる社会づくり

＜主な事業や取り組み＞
○ 認知症に関する情報の周知、普及啓発や**本人発信**の支援
○ 認知症本人や家族によるピアサポートの実施
○ **認知症施策推進計画策定に向けた取り組み**

計画策定に向けて検討

鳥取市の現状

○ これまでも本人発信を重視した活動に取り組んできたが、**一部の本人からの発信に留まっている。**
（鳥取市認知症本人大使「希望大使」の設置、鳥取市認知症フォーラムでの本人による講演、認知症本人ミーティングの開催等）

○「認知症になったら何も分からなくなる」等の古い認知症観が払拭できておらず、早期受診や本人の社会参画に繋がっていない。
本人が体験していることや工夫が重要であることが理解されていないために **「認知症の人＝支援する対象」と考えられている。**

取り組みを通じてめざすもの

○ 本人が主体的に取り組みに参画することをきっかけに、**本人発信等の重要性に本人自身が気づき**、意欲的に行うことができる

○ 本人にかかわる人が本人とともに取り組みに参画することで、**本人発信の重要性**や、**共生社会の実現を推進するための認知症基本法（以下、基本法）の考え方**を**体感**し、その考え方を**それぞれが身近な場で浸透させていく**ことで、地域全体の認知症に関する取り組みの推進を図る



計画策定に向けた取り組みについて

本人を含めたさまざまな立場の人の声や意見を幅広く聴くため、
計画策定ワーキンググループ（以下、WG）を設置

＋ 限られた人だけとの取り組みや意見聴取に留めず、より多くの人の声をもとにした計画になるように

認知症フォーラムの開催

○ 計画策定に向けたキックオフイベントと位置づけ年度当初に開催
○ 参加対象者を限定していないことから、基本法や計画策定に取り組んでいることを広く伝えたり、アンケート等で声を聴く

→市民一人ひとりが計画を創る一員！

既存の事業やつながりの中で

○ 取り組みに先駆けて基本法に関する研修会を開催（各地域包括支援センター職員向け）
○ 認知症本人ミーティングを施設内でも開催し、本人の体験や思いを聴く
○ 日頃の業務で出会う人の声も意識して聴く

私たちの思い

○ 特別なことをしなくても、身近な場で本人参画・本人発信はできる（実はすでにできている）ことを実感してほしい
○ 住まいの場所や状態にかかわらず、認知症になってからも自分のやりたいことに挑戦したり、自分自身で物事を選択できることを、**基本法が施行されたこのタイミングで広く伝え、自分ごととして**考えてほしい

「**本人の声を聴く**」ことをベースに考える
鳥取市が日頃から大切にしていることであり、職員皆の共通認識があったからブレずに検討できた

計画策定ＷＧの設置

主なメンバー

○ 本人　※希望大使、本人ミーティング出席者、小規模多機能居宅介護利用者

○ パートナー　※家族、友人など

○ 小規模多機能居宅介護事業所職員　※本人とともに、パートナーとして

○ 認知症疾患医療センター相談員

○ 認知症かかりつけ医療機関 看護師

○ 認知症本人ミーティング等で関わりのある企業

○ 生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）

○ 地区医師会 在宅医療介護連携推進室職員

○ 各地域包括支援センターの
　認知症地域支援推進員等

○ 鳥取市中央包括支援センター　※事務局
（20名程度）



計画策定ワーキングのスケジュール・各回のテーマ

R6.3	R5	今後のワーキングにおける検討内容・検討方法
R6.5	R6①	今の暮らしの中にある「いいね！」を集めよう
R6.7	R6②	「いいね！」があふれる暮らしを続けていくためにできること・大切なことを考えよう
R6.9	R6③	自分たちの計画について考えよう①
R6.10	R6④	自分たちの計画について考えよう② 鳥取市なりの新しい認知症観って何だろう？
R6.11	R6⑤	自分たちの計画について考えよう③ 目標を達成するために自分たちにできること

実際の計画案について意見交換・アイデアを共有

“対話”できる環境はともに創っていった

全員がはじめから顔馴染みだったわけではなく、
中にはこのような会議にはじめて出席する人や、(ワーキングが無ければ出会わなかったかもしれない)初対面同士の人もいた。

限られた時間で全員が意見を言えるにはどうすれば良いか…？



お互いが意見を話しやすい・聴きやすい環境について、
第1回ワーキングで**一緒に**考えよう！



行政(事務局)がすべてを準備して「出席してもらう」のではなく、
会議の準備段階(意見交換しやすい環境)から**一緒に**検討



“対話”できる環境はともに創っていった

WGメンバーからの主な意見

- ○（よくある会議形式ではなく）**グループワーク形式**が良い
- ○ グループメンバーは各回で変えずに**固定だと顔馴染みになれる**
- ○ 全体で一斉に休憩を取ると、グループワークが盛り上がっているときに中断されるので、**各グループのペースで休憩したい**
- ○ 事前にテーマが分かると、**自分の中で意見をまとめ準備できる**
- ○ 資料の文字が多いと、内容が分かりづらい
- ○ **市役所は怖い**イメージ。通知が届くと「悪いことをしてしまったのかな」と思ってしまう
- ○ 普段から本人の声を聴けている、と思っていたが、**今回のワーキングほどは聴けていなかった**

事務局の工夫（一部）

- ○ 各包括の認知症地域支援推進員がグループワークのファシリテートを実施
  担当圏域内における認知症施策推進の要として**計画策定までの流れを一緒に体感**するとともに、WGメンバーの声を聴く・引き出す経験をしながら、**担当圏域での活動に活かしてほしい**
- ○ グループワーク前に自己紹介＋α（アイスブレイク）
- ○ 開催通知とは別に、平易な表現・イラストを用いてワーキングのテーマの趣旨等を説明する文書を作成。（→イラストを頼りに資料のページを探している本人も）

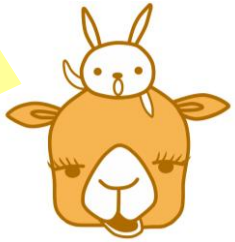
「自分たちの会議は自分たちで創る」
一人ひとりが**主体的に参画**するためのきっかけに

自分の暮らしを通して、自分ごととして考える

ワーキング開催前の情報収集として、認知症地域支援推進員が「本人の声をもとにした活動の好事例」について担当圏域の小規模多機能居宅介護事業所へ聞き取りを実施

【事業所への聞き取り結果（一部）】

事業所の行事よりも、本人が参加したい地域の行事を優先して予定を調整している。一緒に地域行事に参加することもある。



本人からの声はない。
本人の声をもとにした特別な活動はできていない。



暮らしの中で大切にしていること・好事例を共有し、「それっていいね！」と認め合いながらともに検討することで、本人参画・本人発信の実感につながるのではないか



自分自身の暮らしをベースに共有することで、専門職や企業なども、それぞれの立場からだけでなく、一市民として生活者の視点でも自分ごととして考えられるのではないか

自分の暮らしを通して、自分ごととして考える

暮らしの中にある「いいね！」（一部）

- ○ 30歳を過ぎてから新しいことに挑戦。「一緒にやろう」と声をかけてくれる人がいるから、一歩踏み込んでやってみようと思える
- ○ 毎朝30分、近所の神社まで散歩することが日課
- ○ 認知症になってからもお隣さんがごみ当番の日を教えてくれるので、ごみ当番を続けられる

「いいね！」あふれる暮らしを続けるために大切なこと（一部）

- ○ 認知症になる前から、近しい人とコミュニケーションを取ること
- ○ 「自分（家族）は認知症です」と日常的に言えること
- ○ 日常的に近所の人と話せること。本人が迷子になったときに声をかけてくれた
- ○ 誘ってくれたり、一緒に行ってくれる人がいるから行きたい場所に外出できる
- ○ 自分が頑張っていること・取り組んでいることを知ってもらうこと
- ○ 自分の経験を伝えること・伝える機会も必要
- ○ 最近出会った本人同士のつながりを持ち続けること
- ○ どんな状態になっても元気で暮らせる方法を、諦めずに考え続けること
- ○ 困ったときに話せる環境や空気感
- ○ 何度も思いを伝えること、なぜそう思うのか深堀りすること

自分自身の暮らしをベースに（自分ごととして）、暮らしをより良くするために大切なことを話せると、鳥取市全体にとって大切なことのアイデアも生まれる！

鳥取市なりの「新しい認知症観」って何だろう？

ワーキングの後半では、実際の計画案をもとに意見交換やアイデア出しを実施。
その中で**「新しい認知症観」を広めていくことが大切**という意見が多数挙がる。



国の認知症施策推進基本計画には「新しい認知症観」
について説明されているが、具体的に何を広めていけば
良いか、イメージを共有する必要があるのではないか？

（以前のワーキングでも「自分が地域住民に計画について広めていくときに、計画に込められた思いをしっかりと伝えられるか自信がない…」という声もあった）

対話を重ねてきた過程があるから、WGメンバー側から**「新しい認知症観」を広めていくことが大切**という意見が挙がった。
同じ思いを持って一緒に広めていくために、鳥取市なりの「新しい認知症観」についてともに考えよう！



※新しい認知症観：認知症になったら何もできなくなるのではなく、認知症になってからも、一人一人が個人としてできること・やりたいことがあり、住み慣れた地域で仲間等とつながりながら、希望を持って自分らしく暮らし続けることができるという考え方（認知症施策推進基本計画より）

鳥取市なりの「新しい認知症観」って何だろう？

鳥取市なりの「新しい認知症観」（ワーキングで話し合った内容）



認知症は自分ごと
自分にも関係がある

本人（自分）が
主体となり動く

認知症になってからも
できることがある

一人の人間として、
その人らしさを
大切にする

さまざまな場で
さまざまな人とつながり
思いを交わす

話し合ったことを、計画に記載している取り組みを推進するベースとなる「基本的な考え方」として反映

計画（案）における「基本的な考え方」

市民一人ひとりが「新しい認知症観」を理解し、実践する

基本的人権をもつ
一人の人として

思いと力をもって
挑戦し続ける

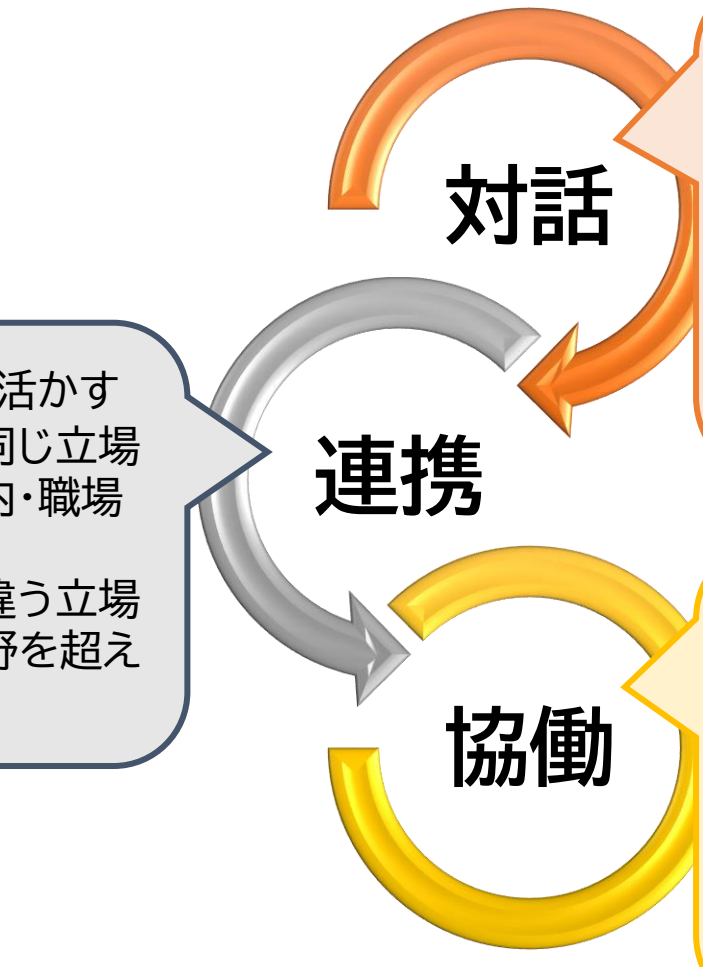
つながりをもち、地域の
一員として役割を果たす

ワーキングを通じて（WGメンバーの声から）

○ 自分のことを話すのは難しいと感じていたが、他の人の話を聴くことで自分の考えをまとめられるようになった。
○ 楽しい話題であれば、皆が笑顔になる。できないことに焦点をあてても苦痛でしかない。
普段の生活の中でも、嬉しかったこと・楽しかったことについて話したり、一緒に活動することで気持ちが豊かになり、そのような環境であれば安心して穏やかに過ごしていけると思う。
○ 計画策定がゴールではなく、どのように広めていくかも検討が必要。まずは自分の身近な人に伝えていきたい。
○ ワーキングの回を重ねるごとに、皆さんとの話が楽しくなってきた！
○ このワーキングのように話せる場が、各地域でもできると良い。
町内の集会所など、小さな単位から！

自然と「対話」を重ねていったことで、
WGメンバー自身もその重要性を体感していくことができた
ともに考え・ともに創るをワーキングの中で体現

鳥取市らしく取り組みを実践 ～対話・連携・協働～



○ 身近な場で対話を重ねる（何度でも・最後まで）
○ 普段の暮らしのこと、やりたいこと、大切にしたい思いを共有する
○ さまざまな人と（いろんな知恵・工夫・アイデアを出し合って）

○ 互いの力を活かす
○ 縦の連携（同じ立場の人・地域内・職場内）
○ 横の連携（違う立場の人と、分野を超えて）

○ 皆が対等な立場（支援する・されるではない）
○ 同じ目標に向かって（ともに）
○ それぞれができることを（それぞれのやり方で）
○ 「新しい認知症観」に立って活動する



計画策定までのスケジュール

R6.1	小規模多機能居宅介護事業所における、本人の声をもとにした活動の好事例について情報収集
R6.3	令和5年度鳥取市認知症施策推進計画策定ワーキング開催
R6.5	鳥取市認知症フォーラム開催
R6. 5～11	令和6年度鳥取市認知症施策推進計画策定ワーキング開催（全5回）
R6.12	市長・市議会への報告
R6.12 ～R7.1	市民政策コメント（パブリックコメント）実施
R7. 1～2	鳥取市介護保険等推進委員会・市議会等への報告

今年度中に策定予定

これからも「ともに創る」

周囲の理解を得つつ、「ともに創る」を諦めずに
「具体的に取り組んでいくことが書かれていないので分からない」という声も。
分からないからこそ身近な人と一緒に考えたり、調べたり、自らアクションすることが「ともに創る」第一歩。
WGメンバーは「ともに創る」ことを体感しているが、それ以外の人にも知ってもらえるような工夫が必要！

計画策定の過程を通して、他の計画を見直す機会に
評価指標について検討する中で、「現在の介護保険事業計画の評価指標だけでは、十分に評価できないかも」と感じるように。
次期介護保険事業計画について検討する際は、評価指標も見直そう！

他課からの声も
上司とつながりのある他課の職員から、
「私も来年度計画を改訂することになっている。ぜひ参考にさせて！」との声も。
この計画の存在を、その過程とともにもっと発信していきたい！
従来の「よくある計画」の殻を破って、市民一人ひとりと創る計画に！

認知症施策推進計画を単独で創って良かったこと

介護保険制度の枠内だけで考えていても、
「認知症になってからも希望を持って暮らし続けること」を実現できない。
今までの考え方をシフトチェンジして、実際に地域に暮らす人たちと
対話を重ねながら一緒に創っていくことで、イメージを共有することができた。

「鳥取市認知症施策推進計画」＝「自分たちの計画」

「本人参画」を本人、パートナーが体験したことで、新たな可能性が見えた。
本人の力の再発見→パートナーの日々の関わりの振り返り
新しい挑戦に向けての一歩を踏み出せた



「新しい認知症観」の実感的理解

WGメンバーの変化

計画を一緒に創ったことで、自分ごととして考えることができ、「自分が新しい認知症観を実践しながら広めていかなきゃ！」と思え、一人一人が今、自分にできることから始めようと思えるようになった

一人の職業人として、そして一人の市民として

家族の変化

「家族のこともっと分かってほしい」
「自分も認知症になるかもしれない。その時は、今あるつながり（家族の集いで出会った大切な仲間）を続けながら、暮らしていきたい」

周囲の変化

周囲の人にも共有しながら進めたことで、市役所職員の1人が、最近短期記憶に不安があることを相談してくれて、受診につながった

自分たちにできることは何か

認知症地域支援推進員が地域の要になって、進めていこう。

全市×各圏域で　ともに

自分の身近な人と
思いを伝え合う

大切な人と
共有し、
一緒に考える

各地域で
具体的な
アクションを
考え、実践する

市民一人ひとりの暮らしがより良くなるように。
将来の自分たちのためにも。
そのためにも　取り組みやすいものから始めたい！

医療生協の支部運営委員会の皆さんと話しました！

- 地域の身近な班会でこの計画を話してみようかな
- なるべく早く受診できるように、医療の体制も変わってほしいね。
- 同じ町内にも気になる人がいる。その人も一緒に話が出来るといいな。
- まず認知症の人の事知るために、一緒に勉強しなきゃ！



おわりに

日々の暮らしという視点で計画策定を進めたからこそ、
市民一人ひとりの暮らしの中で活かされる計画になったと思います。
しかし、計画策定は共生社会の実現のためのスタート地点にすぎません。
自分らしく暮らせる鳥取市をめざして、私たちはこれからも
本人とともに検討し続けます。

計画を創るのは大変な作業
でも、本当に大変なのはこれからだねー。
自分たちのまちは、自分たちで創らなきゃ！
もちろん、私の目の前の大切な人と一緒に！

WGメンバーの声



令和7年1月1日の日本海新聞



（3）　2025年（令和7年）1月1日　水曜日　日本海新聞

人を大切に
鳥取市長新春鼎談

状況伝えて助けてもらう　藤田氏
情報共有の仕組みあれば　松浦氏
認め合う社会で理解進む　深沢氏

藤田　認知症になっても誰もが安心して暮らせるまちにしていきたいですね。

深沢　なって初めて分かることもありますね。

藤田　鳥取市は、認知症になっても本人の意思を尊重し、尊厳を保ちながら暮らし続けることができる「認知症フレンドリーシティ」を目指しています。

松浦　認知症の方が安心して暮らすためには、地域全体で支えていく仕組みが必要ですね。

深沢　私たちの会社でも、認知症の方にタクシーを利用していただく際、ご家族と連絡が取れるようにしています。

藤田　ありがとうございます。

松浦　ただ、プライバシーの問題もあり、どこまで情報を共有するかは難しい課題です。

深沢　そうですね。

藤田　鳥取市では、認知症の方やご家族の声を聞きながら、施策を進めています。

松浦　当事者の方の声を聞くことは大切ですね。

深沢　私たちも、運転士の研修に認知症の方への接し方を取り入れています。

藤田　ぜひ広げていただきたいですね。

松浦　情報共有の仕組みについても、本人や家族の同意を得た上で、必要な情報を関係者で共有できるようにしていきたいと考えています。

深沢　認知症の方が安心して暮らせるまちづくりは、私たち一人一人の意識も大切だと思います。

藤田　そうですね。認知症サポーターの養成講座などを通じて、理解を広げていきたいと思います。

松浦　地域の皆さんが支え合う仕組みをつくっていくことが重要ですね。

深沢　私たちも、できることから取り組んでいきたいと思います。

藤田　ありがとうございます。

松浦　ぜひ、情報共有の仕組みについても、一緒に考えていきましょう。

深沢　はい、よろしくお願いします。

藤田　認知症になっても誰もが安心して暮らせるまちを目指して、皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思います。

松浦　ありがとうございました。

深沢　ありがとうございました。

3 認知症になってからも自分らしく暮らせる鳥取市のために

鳥取市認知症本人大使「希望大使」
藤田和子

45歳で若年性アルツハイマー病と診断後も、認知症の啓発活動に向けて当事者としての体験や考えを情報発信している。日本認知症本人ワーキンググループの代表理事。

藤田　認知症になっても誰もが安心して暮らせるまちにしていきたいですね。

深沢　なって初めて分かることもありますね。

藤田　鳥取市は、認知症になっても本人の意思を尊重し、尊厳を保ちながら暮らし続けることができる「認知症フレンドリーシティ」を目指しています。

松浦　認知症の方が安心して暮らすためには、地域全体で支えていく仕組みが必要ですね。

深沢　私たちの会社でも、認知症の方にタクシーを利用していただく際、ご家族と連絡が取れるようにしています。

藤田　ありがとうございます。

松浦　ただ、プライバシーの問題もあり、どこまで情報を共有するかは難しい課題です。

深沢　そうですね。

藤田　鳥取市では、認知症の方やご家族の声を聞きながら、施策を進めています。

松浦　当事者の方の声を聞くことは大切ですね。

深沢　私たちも、運転士の研修に認知症の方への接し方を取り入れています。

藤田　ぜひ広げていただきたいですね。

松浦　情報共有の仕組みについても、本人や家族の同意を得た上で、必要な情報を関係者で共有できるようにしていきたいと考えています。

深沢　認知症の方が安心して暮らせるまちづくりは、私たち一人一人の意識も大切だと思います。

藤田　そうですね。認知症サポーターの養成講座などを通じて、理解を広げていきたいと思います。

松浦　地域の皆さんが支え合う仕組みをつくっていくことが重要ですね。

深沢　私たちも、できることから取り組んでいきたいと思います。

藤田　ありがとうございます。

松浦　ぜひ、情報共有の仕組みについても、一緒に考えていきましょう。

深沢　はい、よろしくお願いします。

藤田　認知症になっても誰もが安心して暮らせるまちを目指して、皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思います。

松浦　ありがとうございました。

深沢　ありがとうございました。

県内では当たり前の存在になったUDタクシー＝JR鳥取駅前

4 今年の抱負

企業の方と語り合いたい　藤田氏
交流と出会いのつなぎ役　松浦氏
明るい未来切り開く年に　深沢氏

するまち 鳥取市
認知症と共に住みよい地域へ

高齢化社会に伴い、[illegible]内閣府の発表によると、[illegible]65歳以上の高齢者の数は2025年は推計471万人、60年には約3割の1万人に上るとされている。誰もが認知症になり得る中で、住み慣れた地域で自分らしい生活を送る地域共生社会を推進するには何が必要か。関西圏在鳥取市民と、市認知症本人大使「希望大使」の藤田和子さん、市の認知症施策推進計画策定ワーキンググメンバーで、有限会社サービスタクシーの松浦秀一郎社長の3人で「人を大切にするまち　鳥取市」をテーマに語ってもらった。
（司会は新日本海新聞社編集制作局長・井上昌之）

鳥取市長
深沢義彦
1953年鳥取市生まれ。78年、鳥取市に入庁。企画部総合政策課、総務部財政改革推進室、副市長などを歴任。2014年3月の鳥取市長選で初当選、3期目。

有限会社サービスタクシー社長
松浦秀一郎
東京で就職後、2014年に鳥取市へUターンし、18年に同社の社長に就任。市のＰＲ事業に積極的に協力している。市の認知症施策推進計画策定ワーキンググメンバー。

1 認知症施策を振り返って

―藤田さんは「認知症本人大使（仮）」として、希望大使に就任されました。

藤田　鳥取市には、認知症になっても本人の意思を尊重し、尊厳を保ちながら暮らし続けることができる「認知症フレンドリーシティ」を目指しています。

深沢　なって初めて分かることもありますね。

藤田　鳥取市は、認知症になっても本人の意思を尊重し、尊厳を保ちながら暮らし続けることができる「認知症フレンドリーシティ」を目指しています。

松浦　認知症の方が安心して暮らすためには、地域全体で支えていく仕組みが必要ですね。

深沢　私たちの会社でも、認知症の方にタクシーを利用していただく際、ご家族と連絡が取れるようにしています。

藤田　ありがとうございます。

松浦　ただ、プライバシーの問題もあり、どこまで情報を共有するかは難しい課題です。

深沢　そうですね。

藤田　鳥取市では、認知症の方やご家族の声を聞きながら、施策を進めています。

松浦　当事者の方の声を聞くことは大切ですね。

深沢　私たちも、運転士の研修に認知症の方への接し方を取り入れています。

藤田　ぜひ広げていただきたいですね。

松浦　情報共有の仕組みについても、本人や家族の同意を得た上で、必要な情報を関係者で共有できるようにしていきたいと考えています。

深沢　認知症の方が安心して暮らせるまちづくりは、私たち一人一人の意識も大切だと思います。

藤田　そうですね。認知症サポーターの養成講座などを通じて、理解を広げていきたいと思います。

松浦　地域の皆さんが支え合う仕組みをつくっていくことが重要ですね。

深沢　私たちも、できることから取り組んでいきたいと思います。

藤田　ありがとうございます。

松浦　ぜひ、情報共有の仕組みについても、一緒に考えていきましょう。

深沢　はい、よろしくお願いします。

藤田　認知症になっても誰もが安心して暮らせるまちを目指して、皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思います。

松浦　ありがとうございました。

深沢　ありがとうございました。

認知症への理解を求めるたすきをリレー「RUNTOMO」―2023年10月22日、ＪＲ鳥取駅前の進級広場

2 計画策定に携わって

―鳥取市の認知症施策推進計画策定ワーキンググメンバーとして、どのような点に力を入れましたか。

藤田　[illegible]

深沢　今回、[illegible]

藤田　[illegible]

松浦　[illegible]

認知症への理解を求める「オレンジライトアップ」を啓発するチラシ―2024年10月28日、ＪＲ鳥取駅前

鳥取市で開かれた認知症フォーラム。福祉関係者ら約170人が参加した―2024年6月21日、鳥取市のとりぎん文化会館

自分事として考えていく　藤田氏
画一的ではない支援必要　深沢氏

ご清聴ありがとうございました

